パペットとカーテン

松山　豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パペットとカーテン

【Ｎコード】

Ｎ７５５４Ｄ

【作者名】

松山　豊

【あらすじ】

小学校の時から同じ通学路を通い続ける月下亮（つきしたとおる）とその幼馴染、七瀬奏（ななせかなで）。亮は自分の気持ちが奏にあることに、少しずつ気がついていく。クリスマス。亮は奏から手作りのパペットをプレゼントされる。二人の関係は良好に進展していく。しかし、奏が不慮に事故に遭い、目を覚まさなくなってしまう。亮自信も、トラブルに巻き込まれて右腕を負傷。指が動かなくなる。どん底の亮はパペットを胸に、語りかける。すると、奏の声が聞こえてきた。奏の口癖。ひとりでに動く人形。亮は、その人形に奏の魂が宿ったことを信じる。亮と奏

の新たな生活が幕を開け、感動のクライマックスが訪れる。

第一章　「朝」

耳先が痛くて、鼻先が冷たくて…俺は肩を小さくして朝の冷え切った通学路を歩いていた。
幾度となくこの季節を味わってきたが、その度に俺は指先や体のあらゆる末端を冷やされ、マフラーに鼻先を沈めたり、上着のポケットに手を突っ込んで見たりして、北風の侵入を食い止めようとしている。しかし、さほどの効果も期待できるわけもなく、バカらしく北風は入り込んできて、俺の体を冷たくしてくれる。
俺は苦し紛れに腹から息を搾り出して吐き出し、その吐息が白い湯煙に変わるのを利用して、マフラーに暖かさをもたらすことをただひたすらに繰り返していた。
この季節、軽くなった空気は、どこか湿り気を帯びている。空は重い雲が覆い、よどんで静かに漂っているが、目に届く範囲で太陽の光が何本かその雲に刺さっていのが見えた。
後方から足音がして、俺は振り向かずに足取りを緩やかなものにする。
「亮くん、待ってよ…。」
かろうじて聞き取ることのできる高い声。
聞きなれた彼女の高い声。
それは、俺の頭を撫でるように聞こえてきた。
足取りをしっかりとその場でとめ、俺は肩をすくめたまま面倒くさそうに振り返った。
彼女は毎朝俺の後ろにいて、いつでも、大体そこにいる。彼女とは…幼馴染、七瀬奏のことだ。
「お前が遅いんだよ…先にいくからな。」
「ま、待ってよ。」
奏は焦りをにじませ、駆け足で俺の後を追ってくる。
短く切った奏の襟足が微かに見え隠れし、対照的に伸ばした前髪

を右側に結っている。いつもの白い髪留めがその前髪と一緒になって弾んで、それに連動するように長いスカートがヒラヒラと軽やかに踊るようにゆれていた。

俺は奏が距離を縮めるのを見届けると、冷たく湿ったアスファルトから足をあげた。奏は一定の距離を保って、俺の後をつけてくる。それが俺たちの朝の風景で、毎日繰り返してきたことだった。

物心もつかないうちから、俺と奏は隣り合う窓を介してよく一緒に遊んでいた。

引っ越してきた年が一緒で、年齢も同じで、部屋が隣合っていて、互いにまだ友達がいなくて。部屋に入って、気がついたときから俺たちは仲良くなっていた。奇妙な偶然が続くとおもったが、実は両親が友達だったことを、小学生になるころに聞かされた。

それから俺たちはずっと一緒に登校していることになる。

現在は音大に一緒に通っているが、正直、奏が俺と同じ音大に入学希望していたことには驚いた。腐れ縁とはこういうものをいうのだろうと、しみじみと感じる。

俺たちの通う大学は、丘の上に位置している。電車、バスを乗り継いで、途中、朝日が体を温め始める頃に差し掛かる坂道がある。通い始めた頃は、それなりに険しい坂道に見えたものだったが、通いなれるとそうでもなくなってくるものだ。

しかし、入学したての頃は、体力の皆無な奏が道中で疲れてしまい、その度に俺が手を引いて大学まで通っていた。体力に自信があるわけでもないのに、俺はその早朝強制的重労働に多少うんざりしつつも、幼馴染のよしみで奏の手を引っ張り続けた。

そのかいあってか、奏が少し慣れてきたような兆しを見せ始めたのは、今年に入ってからだった。一人でその坂道を、息も絶え絶え登りきるにまでになったことは、かなりの成長と成果だといえるだろう。結局、俺は奏がのぼりきるまで、大学の門を前にして待っているのだが。

大学についても、俺と奏は同じ講義を聴くこととなっている。

通学路の坂道で息を荒げる奏は、大体朝の講義を突っ伏して過ごしている。もちろんのことだが、俺はまじめに講義を聞いて、奏の講義終了後の質問攻めに備えることにしている。

午前中の講義を終えると、俺は数人の友人と大学の近くにある喫茶店に昼食をとりに向かう。そこには、さすがに奏の姿はない。

今日もいつもの昼休みがやってくる、はずだった。がしかし、少しばかり勝手が違ってしまったようだった。

一緒に昼食をとりにきたはずの友人の数名は、俺のそばから距離をとり、喫茶店内でいま進行形で繰り広げられている女同士の闘争と、その中心にいる俺の行く末を心底楽しんでいる様子だ。

「あんた誰なの？」

「あんたこそ誰なの？」

二人とも俺の今付き合っている女たちだった。

先に言っておいたほうがいいかもしれない。俺はそもそも、来る者は拒まない主義だ。浮気なんて認識は最初から俺の中に存在しない。むしろ浮気は男にとって、ステータスだとさえ思っている。結果、こうして度々俺を種に女たちが闘争を起こすというわけだ。

「この前からどうも変だとおもったのよ…まさかこんな女が他にもいたなんて。」

「あんたがこんな男だとは聞いていたけどね…」

どうやらこの二人は妙なところで意気投合を果たしたらしい。ふてぶてしく俺の顔を睨みつける女たち。俺は耳をかいて、あくびを一つ。だらしなく椅子にもたれかかった。

「あんたふざけているの？　目の前に女が二人こうしてあんたのせいでケンカしてるんでしょう？」

「何とか言いなさいよ！　どっちが本命なのよ！」

「わかった…わかったよ。いいから静かにしろ。」

女どもの顔が迫るが、俺はそれをさえぎるようにスッと立ち上がり、その二人の肩を軽く二回ほどたたく。

「なにが静かにしろよ？　あんたがこんなことするからでしょう？」

「余裕こいてないで言い訳の一つでも…」
俺は声を挟み、一言いった。
「ピーピーうるせぇんだよ、アバズレが。」
次の瞬間、俺はその喫茶店の天井を、仰向けになって見上げていた。
頬に痛みがじわりとじわりと脈打ってくる。口の中に鉄の味が広がっていった。
「いってぇ…」
天井の風景に一人の男が笑顔で現れる。
「はははははは！」
俺が痛みに顔を歪めているにもかかわらず、俺の周囲で修羅場を楽しんでいた友人が次々と腹を抱えてこちらに寄ってきた。俺がのびている間に、どうやら女たちは出て行ったらしい。
俺は上半身の持ち上げる。
「うるせぇな…いってぇ…」
「ははは！　でも毎度、毎度お前もこりなねぇな、女と付き合ってそんなになるのなら、俺なら女と付き合ったりしねぇな。」
「ほんとにバカ！　俺もそう思うぜ。」
「いやー、でもホントいいもの見せてもらいましたよ！
次々と言いたいことをぶつけてくる。
「お前らうるせぇっていってんだよ…」
うずく頬をかばうように覆いながら、俺は立ち上がった。ふと喫茶店の窓の外に視線を送る。
向かいの本屋に奏がいた。友人だろうか、数人の女子となにやら笑い合っている。
「はいはい。黙りますよ。プレイボーイな亮様がそうおっしゃるのなら…。」
奏が俺に気がついた。驚きの表情を見せたかと思うと、先ほどの友人になにやら話し始めた。
「ん？　亮？　無視するのか？　お前無…」

奏は友人になにやら断りを入れ、急ぎ足で喫茶店に向かって走ってくる。喫茶店の扉を両手で開け、何もないのに転げるところまで、俺は終始奏を見つめていた。
こけた拍子に長いスカートがふわりと舞い上がり、盛大にこける奏。スカートがはだけて、店内にいた男という男が生唾をゴクリと飲み込んだ。汚れのないことを思わせるような細い太ももを、露出させていることに気を配ることもなく、奏はいち早く上半身を腕で持ち上げて俺と目を合わせた。
「亮くん！　そのホッペどうしたの？」
店内が静かだったからか、その声はまっすぐ俺に飛んでくる。
「いや…どうしたって、お前こそどうしたんだよ？　こんなところに走りこんできて…」
「え？　あ…いや、私は」
最後まで言い切ることなく、奏は言葉を喉にもどした。視線をわずかに落とす。
「それより奏。」
「え？」
「お前スカート…。」
その言葉を発した途端、周辺にいる男たちからの殺意に満ちた視線が、俺の体の四方八方に突き刺さってきた。
「え？　うぁあ！」
奏は赤面して立ちあがり、身だしなみを整えた。
一方、俺の背中を冷や汗が、かゆくする。
「ご…ごめんなさい、みなさん…あの、御見苦しいところを…。」
「いやいや、いいんです。全然、全然構わないんですよ。」
店中の男の声が重なった。付け加えるが、俺の声は除いて。殺意に満ちた矛が瞬時にやわらかくなるのを、俺はひしひしと感じずにはいられない。
奏は体中の血液を顔に集めたまま、逃げるように喫茶店のドアノブに手をかけた。

「あの…それでは…」
「はぁーい、じゃあね、奏ちゃぁぁん…」
ここまで声が重なると、練習をつんでいることを疑いたくなる。何かの異教徒のように奏が店から完璧に退室するまで、俺以外の男たちは手をふり続けた。
「何をしに来たんだよ、あいつ。」
俺は肩の力を抜きながらつぶやく。
ドアが閉まった瞬間、俺はむさ苦しい男に囲まれた。暑い息がかかる。
「な…なんだよ。」
「お前…まさか奏ちゃんに手ぇ出したんじゃないだろうな？」
恐ろしい形相だ。よくみたら胸元にこの店のマスターの名札がついている。
「俺たちのアイドル、奏ちゃんに何であんなに親しげに…しかも、お前の傷のことを…」
拳を握っているやつがほとんどだ。
「い…いや、親しいもなにも、あいつ俺のすぐ隣に住んでるし…。」
「な…」
一人の男が声を上げたが、男は踏みとどまり、一息おいて周囲の同士を見渡し、小さな声で「せーの…」と合図をとると、
「なにぃぃぃぃぃぃぃぃいいいいいいいいいいいいい！」
男の声が重なるとこんなに耳鳴りがするとは思わなかった。合図を聞いた時点で、耳に手を当てておいてよかった。
「合わせなくてもいいだろうが…」
その後、俺は講義が始まるギリギリまで、そいつらが語る奏伝説を聞かされることになった。
講義を終え、帰り道。俺は昼間、奏伝説を聞かされ続けたおかげで疲労しきっていた。奏は心配そうな表情を横からのぞかせてくる。
「なんだかとても調子悪そうだよ？　それにそのホッペ…すっごく痛そう…大丈夫なのかな？」

「あぁ…絶好調だ。心配いらない。まったく問題ない。お前のドジッ子っぷりを延々と聞かされたから、俺はもう元気満天だ…」
「な…なにかな？　それ…」
思い当たるフシがいくつかあるのだろう。うつむいて声が小さくなっていった。
「ん？　知らないのか？　かの有名な奏伝説を。確かあれは奏伝説第二十話だったかな…」
奏の顔が高揚していく。夕日で照らされた顔が必要以上に赤くなっていた。
「基本的に、ノートを持たせるときは、抱えるほど持たせてはいけないらしいな。でないと、今のところ確実にこけるドジを起こす。」
「……」
さらに肩を落とす奏。もはや言葉も出ないといった感じだ。
「それ以外にもたくさん聞かされたなぁ、奏伝説…」
喫茶店の男たちの顔が眼に浮かんでくる。徐々に眼に破棄がなくなっていくのが自分でも分かった。
我に返り、思い出したように俺は奏に問いかけた。
「…そういえば、今日は何で喫茶店に来たんだ？」
「あぁ、あれはあの…」
顔をあげた奏だったが、どうやら言うか言うまいか迷っているようだった。
「どうしたんだよ？」
迷子に道を尋ねるように俺は聞いた。背丈の小さい奏の顔をのぞくと、上目遣いでこちらをとらえてきた。
「…亮君がホッペを赤くしていたから…その…あれだよ…だ、大丈夫かなって。」
俺は殴られた頬をそっと撫でる。口元を緩くなるのを隠すため、マフラーを口元に巻きなおし、背筋を通す。冷たくなりはじめた空気と、茜色に輝く光をその頬にかすらせた。
「そっか…。」

そう言って俺は奏の肩を軽くたたき、歩くよう促した。
「そうなんじゃないかと思ったけどな。」
奏の顔を見て俺は笑った。
安心したのか、奏の緊張は解けていた。
「……うん…。お節介だよね。」
「うーん…あぁ。たしかに、お節介だ。でもまぁ、気にはならない。」
隣には奏の微笑があった。
足並みをそろえることなく、俺たちは大学の門へと歩いていた。途中俺はかすれるような小さい声で一言ささやいた。
「あ…がと。」
「え？」
「なんでもない。」
奏は不満そうに頬を膨らませたが、俺はその顔を見て笑う。ごまかせたかどうかは分からないが、俺たちはいつもより距離を縮めて歩いていたと思う。
その日の帰り道は、なんだか温かくて、寒さに肩をよせる事もなかったのだから。

第一章　「朝」（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
連載になりますので、ぜひ感想をお聞かせください。次回作の参考になります。
二人の行く末になにがあるのか、ニヤけたり、笑ったりしながら読み進めていただければ幸いです。

第二章　「クリスマス」

女という生き物は本当に面倒くさいと思うときがしばしばある。クリスマスがどのように有難いのか、なんてことは、俺が理解しようとしても、一生理解不能なことだろうが、女たちにとっては重大な、それもかなり気合の入る一大イベントらしい。

「久しぶり！　プレゼント交換しましょう！　明日！　恋人たちの夜に！」

一体いつの時代からクリスマスが恋人たちの夜にされたのかは知らないが、そう電話してきたのは二週間ほど前に、喫茶店で俺の顔を見事に左ストレートで打ち抜いた元彼女の一人だった。あいつは何をたくらんでいるのか、昨日突然電話をかけてきたかと思うと、約束を取り付けてきた。

「あ！　あと、あんたもプレゼント買ってきてよ！　交換よ、交換！」

あきれたもので、言いたいことを言うと、そいつはそのまま叩きつけるように電話を切った。

翌日の十二月二十四日、朝。俺は奏を連れてショッピングセンターに来ている。

女のプレゼントに買っていいものがまったく分からなかった俺は、奏の部屋の窓を数回ノックして、当日買い物に付き合ってくれるよう頼んだ。

「……」

いつもそれほどしゃべることのないおとなしい奴だが、どういうわけか、今日は心配になるほど無口だ。

それに、いつもと違うとことは他にもある。学校の時と同じ装いに見えるが、注意してよく見ると、微妙に所々違っている。

ベージュのジャケットはいつも通りだ。スカートの丈は色気のないほどの長さだが、ほんのりと明るい色に変わっていた。

前髪も、右に結っていたものが左右に分けられている。
「…亮…くん」
「ん？」
ショッピングセンターを練り歩く中で、奏がやっと重い口を開いた。
「きょ…今日はなんで私と買い物にきたのかな？」
「あ、そういえば言うの忘れてたな。ごめん。」
事情を説明すると、見ているうちに奏の肩の力が抜けていった。今にも口から煙の出そうな奏をつれて、俺たち二人はプレゼント選びを開始した。
当てもなくショッピングモールの店を転々と歩き回る。店を回る数に比例するように、奏の顔に輝きが戻ってきた。
可愛らしい服をうらやましそうに眺め、レースのついた服をつついては、満面の笑みを俺に向けてくる。
「なぁ、奏」
「え？　なぁに？　亮くん。」
「それ、着てみろよ。」
俺の言葉を聞くと、奏はメトロノームを最速でふったように全力で両手を動かし、懸命に否定した。
「や、ヤダよ！　恥ずかしいよ！　それにホラ…あれだよ、今日は亮くんの彼女さんのプレゼント買いに来たんだし、私が着たらなんだか意味も分からないじゃな？…」
「いいから着てみろって！　ほらほら！」
俺は服を手にとって、奏を試着室に引っ張っていく。アタフタと無駄な抵抗を繰り返す奏だったが、俺は有無も言わさず、試着室に奏を服と一緒に押し込んだ。
「亮くぅん…あれだよ…恥ずかしいよ。」
今まで見たこともないほどに奏は高揚し、奏は服を大事そうに両手で抱えている。
「お前がその服を着るまではこの店を出ないからな！　お前に似合わないなら、きっとあいつにも似合うことはないさ。いいからさっ

さと着てみろ。着てみたいんだろ？」
「う…うん…わかったよ。」
カーテンを閉めていく。途中、カーテンを完全に閉め終わる刹那に顔を出して、
「待っていてね？　置いて行ったりしないでね？」
「ばーか。そんなことしたりしないから早く着ろって。」
残りのカーテンが閉まった。俺は一人で店内を歩き回った。
自分でも、何でこんなことをしたのか分からない。
奏の違った格好を見てみたかったからか、それとも、単なる好奇心か。
すくなくとも、あの元彼女のためにこうして奏に服を選んでもらっているなんて事は、百歩譲ろうが千歩譲ろうがない。
「…着たよ。」
奏の入っているカーテンから声がした。
「あ、あぁ。着たか。あけるぞ？」
なんだか緊張する。俺はカーテンの折れ目に指をかけようと手を伸ばしていく。
「ちょっ、ちょっと待って亮くん！」
「わっ！　な、なんだよ…。」
「そ…その…まだ心の準備が…」
「何言ってるんだよ…んなもんあるか！　こんなところでグズグズしてると日が暮れるぞ。」
「ごめん！　やっぱり脱ぐよ！　はずかしいよ！」
「ばか！　脱ぐなよ！」
俺は破れんばかりに力いっぱいカーテンを横に裂く。
「ダメッ…亮く…」
奏の白いブラジャーに負けないほどの、純白で小さな奏の胸元が俺の目の前に現れた。
「あっ…」
顔が火照る。

奏はまだ腕に残る脱ぎかけの服で、ゆっくりと赤面しつつも胸元を隠す。
俺は視界から奏をはずし、瞬時にカーテンを閉め切った。
「な！　何で脱いでるんだよ！」
「ごめん亮くん…あの…あれだよ…恥ずかしくって…」
「だからってもっと恥ずかしいことになってるじゃねえか…いいから早く着替えて出てこい…いつもの服でいいから。」
「……。」
服を着た奏は、大事そうに試着した服を抱えて顔を隠し、服を元あった場所へ戻しに向かった。俺は奏の手首を捕まえる。
「わっ！　な、なにかな？　亮くん…」
「買ってやる。」
俺は奏と視線を交えることなく言った。
「え？」
「それ…買ってやるっていったんだよ。」
「で…でも」
「それ買ってやるから、だから…今度はちゃんと着て、ちゃんと俺に見せろ！　わかったか？」
今日の俺はなんだか変だった。自分でも何を言っているか分かったものじゃない。それでも奏は、頬を赤くしてもなお嬉しそうに口元と、目を細めて微笑んだ。
「うん…わかったよ。」
俺は初めて人にクリスマスプレゼントを買った。自分のためでなく、人に頼まれたわけでもなく、俺が、誰かのために。本当に、今日の俺は変だとつくづく思う。
昼飯を食い終わると、俺たちは再びまだ回りきれていない店に出向いた。がしかし、俺は元彼女のプレゼントは何でもいいと考えていることに気がついた。奏にプレゼントを買った時点で財布が軽くなったことも、理由の一つだ。結局、百円ショップで「今人気です！品切れ必至！　動物の同部消しゴム。」というものをたまたま発

見し、購入。品切れ必至の割には何の障害もなく手に入れた。
「亮くん…それはさすがに誰も喜ばないよ…。」
百円ショップで会計を済ませてすぐに、奏がさとす様に言ってきた。
「そうか？」
「わたしも貰ったらきっと困るもん。」
「そか。じゃあ来年のクリスマスは奏にこの消しゴムの全シリーズをプレゼントしよう。」
「いらないよ？」
「ライオンの同部だぞ？　キリンの同部なんかは、恐ろしく曲線が美しいデザインなはずだ！」
「だからいらないよ？　本当にいらないよ？」
「安心しろ。ちゃんと予約しておいてやる。枕元に置いておくから安心しろ。」
「…もしホントになったら、亮くんの家の窓に全部投げつけてあげるから。」
「……それは困るからやっぱりやめとく…」
俺たちは歩き疲れれば喫茶店に入ったり、ベンチが空いていれば座って休んだ。室内で休憩すればどこにいても温かくて、何の苦にもならなかった。
途中、奏が刺繍の材料を買うといって付き合った以外に、目的の代物を手に入れた俺と奏は、自由気ままに冬休み初日を満喫した。
元彼女との約束の時間が少しずつ近づく。夕日は沈み、空は深海のように濃く、闇に染まっていく。俺は奏を駅の改札まで送っていった。
「今日はありがとうな…。」
「ううん…わたしこそ、本当にたのしかったよ。」
「……」
「……」
こいつとはよく調子が崩れる。でも、なんだか…

「亮くん…」
「ん？…」
こいつといるのは…
「彼女と楽しんできてね？」
心地よかったことが今日、今分かった。
「……」
「…亮くん？」
「え？　あ…あぁぁ、うん。楽しんでくる…楽しんでくるよ。当たり前だろ？」
奏は笑顔で帰っていった。
俺は元彼女との待ち合わせ場所に来ていた。駅前の大きな時計の前だ。
口から真っ白な息が蒸気のように揺らめいて、その煙をやさしく押しつぶすように今年初めての雪が降りてきた。見上げると、漆黒の闇から白い結晶は次々とこの町にロマンチックな雰囲気をもたらしていくのが見えた。俺は凍えないように小刻みに足ふみを繰り返して、消しゴムをポケットの中で握る。
あいつは来るのだろうか。図られたのかもしれない。俺はなんでここにいるのか。約束の時間を三十分以上過ぎても、元彼女の足音すらせず、俺はけなげに待ち続けていた。
人を待つ時、人はその人のことを思うものだ。しかし、そのときの俺には、元彼女の面影のひとかけらも思い浮かべることはなかった。
奏のことばかりが、俺の頭の中に流れ続けていた。
奏はいつも俺のすぐそこにいて、いつも俺の後ろを歩いていた。手をつなぐこともない。ただ、一緒に学校に行って、一緒に帰ってきた。子供の頃は帰ってきてからは隣り合う部屋の窓を行き来して遊んだな。そのことで、よく親にも怒られた。それでも、あいつといるのが楽しくて、毎日そうやって遊んでいた。いつから、そんなことをしなくなったのだろう…。

「あれぇ？　亮じゃん。何やってるのこんなところで。」
顔をあげると、そこには約束したはずの元彼女が他の男と腕を組んで立っていた。その顔には勝ち誇った何かがにじんでいる。俺は一つため息をもうけて、ポケットに突っ込んだ消しゴムを差し出した。
「なによこれ？」
勝ち誇った顔が一気に崩れる。
「これでその汚い顔でも拭けよ？」
「は？」
「その厚化粧は、化粧落としでも落ちにくいんだろ？」
俺はそれだけ言うと、消すゴムを握ったままポケットに再度手を突っ込み、歩き始めた。俺は元彼女の男の脇を通り過ぎる際、男の肩に哀れみをこめてポンと手を添えた。
「明日の朝になっても、こいつのことを愛してやれよ。」
捨て台詞の決まった俺は、奏の見送った改札を通って家路についた。
久しぶりに、俺は一人で帰り道を歩んだ。
後ろを振り返っても誰もいないのはわかっている。それでも俺は何度も繰り返し振り返った。誰がいてほしかったのか。誰を、その背後の景色に望んだのか。答えはすでに分かっていた。俺は、一人で通るには大きすぎるいつもの帰り道を、できるだけ急いで帰っていった。
家に到着し、電気のついていない自分の部屋に入る。上着をかけると、意識的に奏の部屋を見た。
奏の部屋のカーテンは、珍しく閉じてはいなかった。奏が机に向かって座り、こちらに背を向けているのが見える。俺はポケットに入っていた消しゴムを取り出すと、部屋の窓を開け、奏の閉め切った窓に投げつける。思いのほか大きな音がなる。奏は飛び上がって俺が帰ってきたことに驚き、窓越しにこもる悲鳴をあげた。机の上を片付け始め、奏は何かを袋に詰めて後ろに隠すように持ち、窓に

駆け寄ってくる。
俺は窓をすべてスライドさせる。俺の家と、奏の家の隙間に落ちている雪が一緒に流れる。飛べば届くことができるほどの距離にある奏の窓に、少しでも近づこうと窓辺に座った。
奏が窓を全開にする。
「早かったんだね？」
寒そうに肩をすくめる。白い息も一緒にあがる。
「あぁ。なんかよく分からん用事だったよ。なんだか新しくできた彼氏を見せたかっただけみたいだ。」
「そんだったんだ。なんだったんだろうね？」
どこかホッとした表情を浮かべ、奏は笑った。俺も釣られて笑っていた。
「ホントにな。何がしたかったんだろうな。」
「ね……なにがしたかったのかな。」
「……」
「……」
沈黙がここまで心地いいことは、今までなかった。俺たちは何を話すわけでもなく、つかの間、雪を眺めた。大粒で、湿り気のある雪がだった。
「ねぇ…亮くん。」
「ん…なんだ？」
「小さい頃はさ、こうして寝る前にお話したよね…。」
「そう…だったかな？　子供の頃なんてあまり覚えてないからさ。」
「わたしは覚えているよ。たくさんのこと。」
「…そっか。」
「うん。…そうだよ。」
つかの間に沈黙。
「それしても、奏はいつまでたっても彼氏ができないな？」
「な…なにそれ？　何でそんな話になるかなぁ…」
「今日だって、帰ってきたら誰か彼氏と遊びにいってるのかと思っ

てた。」
「わ、わたしは…あれだよ…で、でも、今年はほら、亮くんだって一人だし…」
「ま…まぁそうだけどな。今年は俺も奏も一人だ。」
「そうだね…そうなんだね。」
静かに笑った。チラつく雪のせいなのか、奏が綺麗に見えた。昼間と変わりないのに。いつもと、少し違うだけなのに。思わず目をそむけて、俺は雪が微かに降りてくる屋根と屋根の隙間を見つめることでごまかした。
「…奏」
「なに？」
「こういう時ってなんていうんだろ？」
「え？　なにって…なに？」
「あの…ほら、あれだよ、あれ…」
「あれって…エヘヘッ…」
俺は久しぶりに奏の笑い声を聞いた。思わず俺の顔も柔らかくなる。
「なにわらってんだよ…」
「エヘヘヘヘッ…ごめんね、だって、亮くんがわたしと同じことというんだもん…」
「同じこと？」
首をかしげる。
「うん…困ったときに、わたしはいつも『あれ…あれだよ』とか言ってるんだよ。」
「あぁ…そういえばそうだな。」
「気づかなかったのかな？」
「気づかないわけないだろ。何年一緒にいると思ってるんだよ。」
「エヘヘッ…そうだよね。実は最近友達に言われて気づいたんだよ。」
「遅いだろうが…もっと早い段階で直してやればよかったな。」

「でも、友達からはかわいいって言われるんだけどな…。」
「知らねぇよ。それより奏…」
「エヘヘッ…なに？」
「言いたいことがあってな…」
奏の笑顔が緊張で固まる。
「な、なにかな？　何でも言って？」
俺も照れくさくて鼻をかく。指先が冷たかった。
「あぁ…じゃあ言うぞ？」
「うん…」
「笑うなよ？」
「絶対に笑わないよ？」
「じゃあ…ゴホン…」
口元に手を添えて喉を鳴らし、俺はまっすぐに奏を見つめた。
奏は真剣に口をヘノ字にまげて構えていた。
「メ…メリー…クリスマス…」
「……へ？」
奏は首をかしげた。
「へ？」
思わず俺も聞きなおしてしまった。
「あ…エヘヘ…あれだね…メリークリスマスだね。」
奏の笑顔がまた俺の前に現れた。まぶしいほどのその笑顔は、俺の笑顔を無理やりに引きずり出していく。
「あぁ…メリークリスマスだ…」
奏は俺がそう言うのとほぼ同時に後ろに隠し持っていた紙袋を俺の前に差し出した。
「奏、これは…」
「うん…今日渡そうと思って…その…作ってみたんだ。」
俺は手を伸ばして受け取った。茶色い紙袋は羽のように軽かった。
「…あけていいのか？」
「うん。いいよ？」

丁寧に包まれた紙袋を、俺は難解な知恵の輪を解いていくように、慎重に、丁寧に開けていく。
中にはかわいい女の子の形をしたパペットが入っていた。手作りのようだ。
「わ、わたしね、パペットを作るのが好きってい言うか、得意って言うか、手芸は全部好きなんだけど、その中でも一番好きなのは、やっぱりパペットをつくることで…だからその…あれだよ…あの…」
相当慌ててることが聞くだけで分かった。
「だから…あの…」
「ありがとう、奏。」
俺は本当の意味で、久しぶりに笑っていた気がする。奏の表情にも明るいものが、内側から顔に浮き上がる。
「大切にするよ、これ」
「うん！　ありがと…亮くん。」
俺たちはその晩、奏が眠くなるまでいつまでも話し込んだ。小さい頃の思い出が、いつもの大学の他愛もない出来事が、俺たちの会話をもりあげた。もちろん、今日起こった出来事もすこし笑いの種なった。
その日、俺は眠る前に自分が今日たくさん笑っていたことをジンワリと思いながら眠った。

第三章　「素直」

クリスマス以来、俺と奏はこれといって変わらない毎日を送っていた。
変わったことといえば、大学が冬休みに入ったこと。それと、奏が朝起きて窓をノックし、俺を起こしてくるようになったことくらいだ。
今朝も俺のすぐ隣にある窓から、ノックの音が振動する。
「亮くん、おはよう。朝だよ、起きて。」
「ぅ…奏…もう少し寝かせろよ…まだ朝だろ？」
「なに言ってるの、今日は一緒に初詣に行く約束じゃなかったかな？」
「ぅぅ…そんなこといったか？」
「いったんだよ、ほらほら、早く起きてよ。」
休みなくノックの音が響く。
俺は昨日、確かに奏と初詣に行くと約束していた。布団から手をヒラヒラとチラつかせながら、寝ぼけた声で言葉をかえした。
「わかった、わかった…。起きるから…着替えたら家に来いよ…。」
「うん、わかった。早く着替えてね？」
奏はカーテンを閉め、俺は寝返りをうつ。眠かったから。
その途端に、奏の窓のカーテンが勢いよく裂かれる。
「亮くん！」
観念して俺はベッドから出た。
服をモタモタと着替える。冷え切った廊下を通り、まだ開ききらない瞼をこすりながら、リビングの扉を開けた。
「亮！　やっと起きたのか！」
奏の父親がリビングのコタツでくつろいでいた。
「あら亮ちゃん、おはよう。いいお正月ね。」
その隣には、奏と瓜二つの母親が座っている。俺は苦笑しつつ、二

人に頭をさげる。
「お、おはようございます。今朝も早いですね。」
俺の家、すなわち月下家は、休日になるとこういった具合に、七瀬家と二世帯住宅となる。これも今に始まったことではない。慣れたものだ。
「馬鹿やろう！　一昨日から帰ってねぇに決まってるだろうが！」
「そ、そうですか…。」
どうやらちゃんと家に帰っているのは奏一人のようだった。
奏の父親の話を聞き流しながらキッチンに向かう。
コーヒーメーカに溜まっているコーヒーをカップに注ぎ込んで、香ばしい湯気が立ちあがる。ふとその七瀬家の脇を見ると、仲良く抱き合って眠る両親が目に入った。
「うちの親はどうなってるんだ…」
頭が痛くなった。俺はコーヒーをすすり、ため息に似たものを吐き出す。
「がははは！　亮！　両親の仲がいいのはいいことだ！　そうだろう？」
「はは…そうですね。」
不意にチャイムがリビングに孤立して鳴った。
「亮くん？　起きてるかな？」
玄関が開く音と、奏の軽やかな声。
男性ホルモンの塊のような奏の父親は、声を聞きつけるとほぼ同時にコタツから飛び上がった。
「お！　奏のやつ来たみたいだな！」
「そうですね、お父さん。」
一目散に玄関に向かっていき、その様子を、おっとりとした奥さんが見送る。玄関から奏の悲鳴が聞こえてきた。
「わ！　お父さん！　寝てなかったの？」
「朝奏を抱きしめない親がどこにいるんだ！　さぁ奏！　パパの筋肉の胸板に飛び込んでおいで！」

「いやぁぁぁぁぁあ！」
断末魔が響く。俺は奏に手を合わせた。
リビングに入ってきた奏は、何とか一人で立っていた。せっかくセットした前髪は、すっかり解け、今にも泣き出しそうな面をさげていた。玄関につながる廊下には、見覚えのあるごつい男の足が時々ピクリと痙攣し、うつ伏せになっていた。
「亮くん…行こう。」
「ぁ…ぁぁ。」
とりあえず奏に鏡をみせてから、俺たちは初詣に向かう準備をした。
奏の前髪も元通りになり、気を取り直して俺たちは初詣に向かった。
いつもは大学に行くときに利用している電車に乗り込み、奏の案内のもと、目的地を目指す。
初詣には久しく行っていなかった俺は、この人の多さに目を見張った。電車に乗ったときはまだよかったが、駅が目的地に近づくにつれて、電車内の人口密度が高くなっていく。人の体温で額に汗がにじんでくる。俺と奏は、開くことのない扉に押し込まれ、密着したまま電車に揺られていた。
「奏……」
「ん？　なに、亮くん。」
息が互いにかからないよう努めて、声を潜めて話す。
「あと何駅すれば着くんだ？」
「うーん…あと…あと5駅かな。」
平然といい放つ。俺と奏はそのまま二十分ほど、車内のサウナで過ごした。
「あー…やっとついたのか…。」
思わず肩の力が抜ける。それを見て、奏が元気に笑いかけてきた。
「エヘヘッ、たしかにキツかったかな。」
「キツかったな…。奏、さっさと行こう。あんまりのんびりしてると、またあの電車に乗ることになりそうだ。」

開放的な晴天の下、俺たちは初詣に向かう人々にまぎれて進んだ。
途中、俺たちの前に露店が点々と並び始めた。いくつも俺たちの横を露店が通り過ぎていったが、ベビーカステラの看板が奏の目にはいると、俺は奏に上着をつままれた。
「亮くん、亮くん！　懐かしいね、あれビーカステラだよ！」
俺の上着をグイグイと引っ張りながらはしゃぐ。
「あぁ、たしかに懐かしいな…。」
「小さい頃はさ、このベビーカステラ買うために一緒にお父さんたちにお願いしたよね。」
「そういえば…そんなこともあったかもな。」
奏はいつもさげている肩がけ鞄から財布を取り出し、俺の前にちらつかせる。
「ねぇ、一つ買う？」
にっこりと奏が笑みを浮かべる。
「お、いいな。買うか？」
つられて俺も笑う。奏の微笑みは満面の笑顔に変わった。
「エヘヘヘッ、買う、買う！」
甘い香りと、やわらかい湯気の昇るベビーカステラを、うれしそうに奏は抱えていた。湯気は奏の顔を触りながら、歩いた跡に残されていく。俺と奏は交互にその袋に手を突っ込み、カステラを一つずつ口の中に入れていく。
「エヘヘヘッ、久しぶりに食べるとなかなかおいしいね？」
「そうだな。こういうものの味ってずっと変わらないよな。」
「そうだね、小さい頃に食べたのも、こういう味だったかも。」
カステラは少しずつ減っていった。奏が欲を出して一番大きい袋を買ったが、俺たちは初詣を終えるまでに半分ほど食べつくし、昼飯時には出口をふさがれて奏の鞄の中に入れられてしまった。
「なんだかあまりお腹減ってないね。」
初詣を終えた帰り道、奏が腹をさすりながらポツリと言った。
「当たり前だろう、あれだけカステラ食べたんだからな、まだ残っ

てるし。」
「でも、お昼はちゃんと食べられるよ？」
「…腹壊すぞ？」
「あ、そうそう。この辺においしい甘味処があるんだよ。」
「…それは昼飯なのか？」
結局、俺は奏に案内されるまま、奏の言うところの昼食をとりに向かった。
「……甘いなぁ…。」
奏の瞼がとろけている。俺はその表情を眺めながら雑煮を啜った。甘味処は駅から少しばかり外れたところにあった。小さい店で、人もそれほど来てはいないが、確実に人の出入りが繰り返されている。たしかに、雑煮は甘すぎず、しつこ過ぎず、甘いのが好きなわけでもない俺でも箸が進んだ。
「…甘いなぁ…」
一口大福を味わうごとに、奏はとろけていた。
「おい、奏」
「甘いよぉ…」
「おーい…」
「苺甘い…」
「奏ちゃーん…」
「はっ！　ご、ごめん亮くん…。」
奏が甘いもの好きだったことは昔から知っていたが、ここまで症状が悪化していたということは知らなかった。
それから奏は大福をおかわりした。俺はついでにみたらし団子を一つ。結局、俺たちは日が傾くまで他愛もない話をした。
店を出る際、大福にまだ未練を見せていた奏に、俺は土産を買って帰ることを進めた。
「買っちゃったよ…苺大福。」
「それは土産だろう？」
俺たちの乗った車両には誰も乗っていなかった。傾きかけた太陽が、

窓を隔てて俺たちの背中を暖めてくれる。
「お土産でもいいの、結局わたしも食べるんだから。」
「安心しろ、お前の分は俺が全部食べる。」
「だ、だめだよ、安心できないよ？」
「そういうな、絶対に全部食べてやるから。」
「絶対にだめだよ？　心底遠慮するよ？」
「お前はもう二個食べただろう？」
「そ、それはそれだよ…晩御飯のあとに食べれば大丈夫。」
「なにが大丈夫なんだ、なにが…」
「大丈夫だよ、太らないんだよわたしは。」
「そういえばお前…今朝よりアゴにお肉がついていないか？」
「え、うそ！」
奏は必死にアゴをむしる様に何度もつまんだ。
「ハハハハッ！　そんなわけないだろう？」
「へ？　嘘なの？」
「嘘だな。でも、そんなに甘いものばかり食べるのも体に悪そうだぞ？」
「うぅ…そうかなぁ…」
苺大福の入った包みに向かって口を尖らせ、奏は落ち込んだ。
「だから体を壊さないように、俺が奪い取ってでも食べてやる。」
「……」
奏が固まって俺を見る。
「ん？　どうした奏？」
「え？…う、ううん。なんでもないよ…エヘヘヘヘッ…なんだか嬉しくて…エヘヘッ」
奏の笑顔に、顔が湧き上がっていくのを感じる。口元がつりあがるのを必死にマフラーで覆い隠す。
「ん？　亮くん？」
「…なんでもない……そういえば奏…」
「なに？」

首をかしげて奏はあいづちをうつ。目をそむけて俺は続けた。
「その…その笑い方なんか変じゃないか？」
「え？　そ、そうかなぁ？」
「そうだ…なんだか、こっちまで笑えてくる。」
奏は困って口元に手を当てていた。俺のマフラーが振り向きざまにはだける。
「べつに、その笑いかたが嫌だとか、そんなんじゃないんだ！…ただ…あの、あれだ…あれ…」
　俺の目と奏の目があう。たぶん、同じことを考えていたんだと思う。
次の瞬間、俺と奏は笑い合っていた。
「ハハハハハハッ！」
「と…亮くん、またわたしのマネしたぁ…エヘヘッ…」
「ハハッ…ついだよ、つい。お前がいつも言ってるせいだろ…」
「エヘヘッ…そんなことないよ…あれだよ…亮くんがマネするのが悪いよ…。」
俺は自分が笑っていることに気がついた。笑顔って、こんなにも自然にこぼれて、こんなにも気づかないうちに溢れているものだってことに、いまさらながらに気がついた。いや、こいつに教えてもらったんだと、その時理解した。
二人しかいない車両に、二人の笑い声と、顔と、その場の空気が心地いい空気があることがわかる。
　今の今まで、感じたことのない感覚。俺はその始めての感覚を、じっくりと体にしみこませるように感じ取り、いま隣にいる奏に精一杯笑顔をふりまいた。
「ハハハッ…まったく、奏は本当に面白いな…。」
「面白いのは亮くんだよ…エヘヘッ」
俺は息を整え、笑い声を抑えながら奏に向き直る。
「ハァ……なぁ、奏…」
「へへ…なぁに？　亮くん…」

「あのさ…俺」
突然車両の連結部分から誰かが入ってくる。その音に、俺の言葉は飲み込まれてしまった。俺は訪問者に鋭い眼光を込めて振り返った。
その来客は、俺の知らない男だ。男は食い入るようにこちらを凝視してくる。
「先輩？」
奏の声が俺の耳元を通り過ぎた。
「七瀬くんか？」
俺は男と奏の顔を交互に見回す。奏は立ち上がってその男のところに駆け寄った。
「大塚先輩ですね？　ご無沙汰です。」
「やっぱり七瀬くんか。見違えたよ、こんなに綺麗になって。」
奏は俺に背をむけて、その男と話していた。俺はただ口をあけたまま、その様子を窺う。
「あれは…月下くんか？」
男は俺の名前を知っていた。
「そうですよ、亮くんです。」
奏がそういうと、こちらに奏が男を連れてきた。俺の前にその男は仁王立ちして上から睨みつけてくる。俺はにらみ返し、その瞬間にこいつが誰なのか思い出した。
「亮くん、覚えてないかな？　大塚先輩だよ？　高校の吹奏楽部の先輩。」
たしかに見覚えのある顔だった。吹奏楽の部長、大塚。黒い髪をスッキリと刈り、見るからにまじめそうな印象をうける。俺は部活に入らなかったからよくは知らない。ただ、奏とは仲がよかったことが、今この場の空気で良くわかった。
「あぁ、あの人か…。」
「それにしても偶然ですね…」
大塚は奏に話しかけながら俺の隣に座り、奏を自分の隣に座らせた。
二人の話がはずみ、奏の笑う声だけが俺の耳に入ってくる。俺は

電車を降りるまでずっと奏の声をうつむいて聞いた。
「七瀬くんがここまで綺麗になるとは思わなかったな。」
「そ、そんなことないですよ…」
「いや、綺麗になったよ、高校時代からそう思っていたけどね。」
「うぅ…そうなんですか…あの、あれです…恥ずかしいです」
「ハハハッ、ごめん、ごめん七瀬くん。そんなつもりじゃなかったんだけどね。ただ、男として率直な感想を述べたまでだよ。気分を害したのなら悪かった。」
俺の顔のすぐ隣で、大塚は頭をかく。
「あの…べつに悪くなんて…」
「いや、少々言い過ぎたよ。君の彼氏も気分を悪くしてしまう。」
大塚は俺を盗み見ながら言った。俺は無視した。
「ぁぁっぁあの…亮くんは彼氏とかそんなんじゃなくて、あの…ぁあれです、あの…」
「ハハハッ！　わかっているよ、見ていればね。この男は女たらしだったからね。」
大塚の声が俺の耳にまとわりつく。唇をかみ締め、俺はずっと憤りを抑えていた。
「それじゃあ、先輩。さようなら。」
「あぁ、七瀬くん。それじゃあまた。」
男は電車に残って奏と手をふっていた。扉が閉まりきる前に、俺は奏を置いて改札に向かう。奏は俺の跡を駆け足で追ってきた。
「亮くん待って。」
俺は黙々と歩いた。いままで感じたことのない気持ち…。なんだか、すごくイラついた。
「亮くん、ねえ…」
「なんだよ…」
立ち止まる。振り返ると、奏は言葉を選ぶように目を泳がせていた。
「なんで…怒ってるの？」
不安そうだった。黄昏に照らせれて、綺麗に、ハッキリと写る奏か

ら俺は目を背ける。
「怒ってない…」
それだけつぶやくように言うと、俺たちはゆっくりと歩いて帰った。
奏は俺の後ろを静かについてくる。奏はそれから一言も話しかけてこなかった。
先ほどの黄昏も、外の気温もすっかり落ちた。俺はじっくりと時間をかけてあるいたが、帰り道がやけに早く感じた。奏は俺の家の前を通り過ぎると、自分の家に帰っていく。
「かなで…」
俺はなぜか奏を呼び止めていた。奏は声を聞きつけると、ゆっくりと振り返る。
「どうしたの？」
不安げな顔は崩していなかった。俺は奏に歩み寄っていく。
なんて言えばいいのか、俺は戸惑っていた。こいつを怒らせたりはしないだろうか…。
お前に伝えたい思いがあるのに、俺にはその言葉を選べない。
「奏…おれ…」
「……」
言葉が出なかった。心では、いくつもの言葉が飛び交うのに。焦った。
奏はじっと俺の顔を見つめたまま、俺の言葉を待っている。大きな瞳には、冷静さと期待が入り込んで見え隠れしているように、俺には見えた。
「帰り道…」
「うん…」
「……はやく…歩きすぎたよ。」
奏はうつむいた。
俺は自分がつくづく嫌になった。自己中心的で、短気で、嫉妬深い。その上、卑怯だ。
「でも…」

もっと言いたいことがあるのに、喉に何かが邪魔して必要な言葉が出てこない。
「明日も…起こしてくれないか？」
うつむいていた奏は顔をあげる。眉をハノ字にして、笑っていた。
奏が腕を後ろで組み、俺の顔を覗き込んでくる。
「もう、しょうがないなぁ。いいよ…毎日、これからも起こしてあげる。」
俺もその微笑に返事をするように、思わず笑顔がこぼれた。内心、ホッとしていた。
「亮くんは休みの日ならいつまでも寝てるからね…。言われなくても起こしてあげるよ…だから」
奏は俺に近寄り、指で俺の額をつついた。
「ちゃんと起きてよ。」
「イテッ」
奏は俺の家に駆けていくき、玄関先で振り返った。
「亮くん、早く入ろう！」
額を押さえて、奏の一連の動きを見つめた。俺たちは競い合うように部屋の中に入っていった。
笑い声が玄関の扉が閉まって途切れる。
その晩、月下家と七瀬家の二世帯で夕飯を食べた。鍋をつつき、笑い声が途切れなく流れる。七瀬家の両親二人はそのまま俺の家にて就寝。奏は俺の部屋の窓から自分の部屋に帰っていった。
自分の部屋に帰った奏が頭を下げてくる。
「今日もうちの両親がお世話になります…。」
「何言ってるんだよ。今に始まったことじゃないだろ？」
「それもそうだね。」
俺たちはいつものように微笑を互いに送っていた。俺は窓の淵に座る。
「…今日は、楽しかったか？」
俺は奏に尋ねた。奏はふざけて腕組をして考え込む。

「うーん…そうですねぇ…お土産の大福、亮くんの分をわたしにくれていれば楽しかったかなっ。」
奏は「エヘヘッ」と笑って首をかしげる。俺はその顔を、今度はまっすぐに見ていれた。素直に今は言える…。
「かわいいな…」
「え？」
俺は自分が自然に口走った言葉の意味に、頬を赤くした。それ以上に、奏はすでに頭から湯気を出していた。
「ぁぁああの…亮くん、今なんていったのかなぁ…あの…」
「い…いや、ち、違う違う違う…あ、あれだ…あの…パペットのこと！　そうそう、あのパペットかわいいよなぁ！」
「そそそ…そうだよね！　あのパペットの事だよねぇ、うん、うん…」
奏の蒸気は一向に立ち上り続け、俺は自分の体温が上がっていることに気がつく。
「そうそう、パペットのことだ…パペットの…」
「うん…パペットだね…パペット」
どうにか落ちついてきた奏。胸をなでおろして深いため息をつく。
俺はそんな奏を見て、いとおしくて、笑顔がこぼれていくのを受け入れていく。
　さっきは口走ったけど…
「でも…」
今度はちゃんと言う。
「今日のお前の服。」
　自然にこぼれた言葉じゃない。
「似合っていて可愛かった。」
　俺たちは見つめ合った。
　不思議と奏から蒸気は上がらなかった。そのかわりに、そんな俺たちの熱を冷ますにはちょうどいい風が、二人の隙間を通っていった。

「エへへへへへッ…」
くすぐったそうに、体をひねる。すぐに奏は向き直って俺に手招きをした。
「なんだ？」
「いいから、いいから。」
耳をよせる。奏がそっと窓から身をのりだして、耳打ちをしてくる。
「ありがとうね…亮くん…お礼だよ。」
頬にキス。
「……」
手を当ててみると、たしかに湿った部分がある。奏をみると、頬を赤く灯していた。
「エへへへッ…」
「か、奏…」
「あ、あれだね…はずかしいね。」
「……」
「じゃ、じゃあもう寝るね…おやすみなさい…。」
ゆっくりとカーテンを閉めていく。俺はしばらく呆然として動けなかった。
体が動くようになると、俺は一目散にベッドにはいった。なかなか眠ることができず、日がのぼりだしたころ、眠りにつくことになった。
おかげで翌日、奏にたたき起こされるハメになってしまった。

第四章　「奇跡」（前書き）

小学校の時から同じ通学路を通い続ける月下（つきした）　亮（とおる）とその幼馴染、七瀬（なせ）　奏（かなで）。

二人は大学生になった今もなお、その関係を続けていた。

互いにいままで幼馴染として接し、つかず離れずの距離を保ってきた。しかし、亮は自分の気持ちが奏にあることに、少しずつではあるが気がついていく。

数日後のクリスマス。亮は奏から手作りのパペットをプレゼントされる。翌日から二人の関係は変化を遂げていった。

亮は、自分の気持ちに気づいているのにも関わらず、好きといえずに今の奏との関係にとどまっていた。

ひょんなことでケンカした二人は、いつかのつかず離れずの関係に戻ってしまう。

そんなとき、事故に遭いかける亮。

奏は亮をかばい、命を取り留めたものの、植物状態に陥る。亮自身も、聞き手の右手を負傷し、動かなくなってしまい、絶望してしまう。

奏への思いがつのり、一日中泣き明かす亮。

奏がくれたパペットを胸に、亮は奏に問いかけるように語りかける。

パペットをはめると、亮の頭から、奏の声が聞こえてきた。奏の口癖。人形のしぐさ。そのすべてを感じ取った亮は、その人形に奏の魂が宿ったことを信じる。

亮と奏の新たな生活が、二人のたどり着く先に向かって歩き始めた。

第四章　「奇跡」

「まだまだ寒いな…」
「そうだね…寒いよねぇ。」
目を細めて俺と奏はあいづちを打ち合った。その姿はまさに、仲のいい老夫婦にもみえただろう。湿り気のある通学路を、俺と奏が肩を並べて歩いていた。いつものように、誰もいない通路を。それはもうゆっくりと。
雲はほとんどなかったが、やはり二月の中旬は、まだまだ寒い。むしろ、いまこそ冬本番といったところだ。度々、互いに肩をぶつけて、ぶつけられて。笑い声を交えながら足並みを乱す。
冬休みを挟んだ俺たちの関係は、いままでとはまったく違うものになっていた。
こうして毎日肩を並べて登校するようになったのもそう。何より会話がはずみ、俺の中での毎日が、楽しくて充実したものになっていた。ほんの少し前にあった二人の距離は、いつの間にかゼロに近いものとなっている。俺自身、自分の気持ちに気づき始めていた。
ただ…奏にこの気持ちを伝える勇気は俺にはなかった。
俺にはまだ、こうして奏の大切さがわかっただけで一杯で、満足してしまい、口元が釣りあがってしまう。そのことを口にした瞬間、俺たちのこの心地いい関係が、ないものになってしまうことを俺は常に恐れていた。だから、口にはできなかった。
奏の肩に何度目かわからないが、肩をぶつけたとき、
「今日はお前どうするんだ？　残ってピアノ弾いていくのか？」
言葉と一緒に、湯煙のような息を足跡の変わりに残しながら、俺は奏に話しかけた。今度は奏の口から湯気が上がり、お返しに奏も肩をぶつけてくる。

「うーん…そうだなぁ、わたしは残ってやっていくつもりだけど…亮くんはどうするの？」
交互に息を交換する。ぶつかり合いはひとまず中断した。
「俺はやめとく。」
「どうして？」
「……面倒だ。」
「そんなんじゃ、コンクールでいい成績、残せないよ？」
「わかってるよ、俺はかげながら努力するほうなんだ。」
「エヘヘッ、亮くん…それをわたしに言ってる時点でダメなんじゃない？」
奏は笑みを携えて俺の顔を覗き込んでくる。今日は右に結われた前髪がたれ下がる。
その顔に弱い俺は、いつも視線をずらしてはぐらかすことしかできない。
ふたたび俺は肩をぶつけて抵抗した。
「う…うるせぇ。」
それを合図に、俺たちは駅まで交互に繰り返して歩いた。
のんびりと登校する俺たち。いつもより、坂道ものんびりと登ることが多くなった。その分、朝の昇りたての柔らかい陽だまりを、全身に浴びることができる。
こんな日々がいつまでも続くことを、俺は祈願してならなかった。
午前中の講義をおえると、日もすっかり昇り、快晴の冬空のもと昼食をとるが、いつもの喫茶店には奏のファンがいるので、近頃奏と仲のいい俺は、出入り禁止の張り紙を設けられた。
それを知ってか知らずか、奏はタイミングよく俺に弁当を作ってきてくれるようになった。どうやら奏はいつも友人とは弁当を持ち寄って食べていたらしい。最初は抵抗もあったが、食べてみるとこれが結構うまい。大き目の弁当に入れられた色とりどりのオカズたちを、俺は遠慮なく頂戴する今日この頃。
結局、奏の友人の仲間に入れてもらい、昼食の時間を有意義に過ご

すようになった。
こちらも、もちろん抵抗がないはずがない。むしろ、望んでなどいなかったと言った方が正確だろう。
最初はひとりで奏の弁当を堪能していたのだが、その現場を奏に発見され、確保された挙句、奏の友人と昼食をとることになったのが、そもそもの始まりだ。
慣れてしまえば、以外に悪くないと思うのはなぜだろうか。
「亮くんはいいねぇ…奏の愛妻弁当か？」
「…その台詞はもう聞き飽きたぞ、宮路。」
奏の友人の中でも男勝りな女が俺に話しかけてくる。
髑髏をモチーフにした服装からは想像もできない、聖歌隊のメンバーだ。細身ではあるが、出るところは出ている。そんな体のどこから聖歌隊に入るほどの声量を持ちえているのかが常々疑問だ。
「いつも、いつも奏に弁当作ってもらっているからだよ、この幸せモンが。なぁ、奏ン…わたしにも作ってくれよ？　わたしも奏ンの弁当がたべたいぃぃ…」
猫なで声で奏に頼みこむ。その声を聞いて背筋に氷が通ったように俺は身震いした。
奏は箸をとめて笑いかけ、
「遼も？　いいよ、明日作ってきてあげる。」
「さすが奏！」
遼（はるか）とは、宮路の下の名前だ。初対面で名前を奏に見せられた俺は「りょう」と読み間違えて、そのことが勘に触ったのか、遼に思い切りひっぱたかれたことを思い出す。
「奏さんはやさしいですねぇ…わたしも作ってもらいたいです。」
宮路のとなりでいかにもお嬢様な風間さんがさりげなく奏に頼んだ。
「奈々も？　いいよ。じゃあ明日はわたしがみんなのお弁当つくるね。」
奏の機嫌がなぜか上々だった。俺はだまって三人のやり取りをお

かずに、次々と口に箸を運んだ。
奏によると、この二人とは大学に入ったときからずっと行動をともにしている仲らしい。宮路と風間さんは、同じ聖歌隊のメンバーらしく、出会いのきっかけは奏のドジが原因だそうだ。どんなドジを踏んだのか気にはなったが、奏はかたくなにそのことを話したがらなかったので、結局聞きそびれてしまった。
「明日はなにがいいかなぁ。」
一人ごとなのか、尋ねたのか曖昧なことを口走った奏。それでもこの二人は奏の発した言葉に食いついていくので面白い。
「わたしはとりあえずミートボール丼にしてくれ！」
「うん、わかった。」
遼の発想の展開にはいつも驚かされる。パックのお茶が、俺の口から飛び出そうになる。
それを易々と了解する奏も奏だと思う。器がすごいのか、それともこいつのお弁当メニューの中に、すでにミートボール丼が存在していたのか。
次に、風間さんが小さく手を上げて発言する。
「わたしは、奏さんの得意料理を所望したいです。」
「わかったよ、明日楽しみにしてて。あ、亮くんは？」
三人の視線が俺に釘付けになる。とくに、遼はなにか面白いことを言えといわんばかりに、ニヤついてこちらを見ている。
「奏と一緒で。」
「はぁぁぁぁぁあ？」
案の定、遼はつまらなさそうに体をひねった。俺はそれを無視する。
「わかった。じゃあ決まりだね。」
「おい、おい奏ぇ！　いいのかよ？」
遼がどうにか自分が楽しい方向にことを運ぼうとしたが、奏は笑って流すだけだった。それを見て俺は思わず鼻で笑う。
「おい、亮！」

遼の指が俺の目と鼻の先に突き刺さる。
「なんだよ。」
そっけなく答える。
「笑いを求めるお笑いの魂はどこにやったんだ！」
「そんなモン俺にはない！」
昼食は時々滞り、笑いを交えて、時間と共に流れていった。
今日の奏の弁当もうまかったが、「ごちそうさま」としか俺は言えずに、奏に弁当を手渡すことで、俺の新しい昼食も終わりをつげる。
昼食をとり終えた俺たちは宮路たちと分かれ、午後の講義に向かうのだった。
今日一日の講義を終えた俺は、久しぶりに一人で帰った。
いつもは門の前で奏が待っていてくれる。それも、今日はない。
唐突に吹き付ける風が、今日は妙に冷たく思った。話しながら降りていく坂道も、今日は早歩きで降りていく。電車の中でも俺は暇をもてあましてしまった。奏がいないそのひと時。その小さな孤独を俺はかみ締めるようにして楽しんだ。
帰宅をした俺は、ピアノに向かう。
ガキの頃からやり続けたピアノ。俺にはもうこれしかない。
今まで多くのコンクールで賞を受賞。このままプロを目指すか、講師を目指すか。今の俺には選択肢が存在する。ガキのころの俺からはまったく想像することのできない出世だ。
一時期、マスコミにすら騒がれたこともあった。一応、うちの大学でも今回のような小さなコンクールがあるが、一応はコンクールはコンクールだ。手など抜くことはできない。求めるのは、最優秀賞のみだ。
俺は鍵盤に指をはわせ、確かめるように撫でる。指が勝手に動いていく。これはＣＡＮＯＮだ。
『複数の声部が同じ旋律を異なる時点からそれぞれ開始して演奏する曲』…。二つの音が、始まりは同時だが、まったく違う音色を

演奏し、かつその音色は絶妙に絡み合う。
俺はこの曲を選んだ。俺がもっとも好きな曲。昔、奏と二人で習った曲だった。
あの頃は一緒にコンクールにも出ていたのに、奏はいつの間にか俺の出るコンクールを客席から見るようになっていた。なぜそうなったのか、俺には見当もつかなかった。奏に聞いてみても、俺の演奏を聞きたかった、としか言わない。
というのも、俺にも思い当たるフシがあるからだ。
一度奏とコンクールに出たとき、俺は奏に負けた。最優秀賞は奏に持っていかれたのだ。もう覚えていないが、俺はそのとき奏にひどいことを言った気がする。言葉にはしないが、あのときから俺と奏は離れ始めた気がする。少しずつ、時間をかけて。そしていま、俺たちはまた、互いに歩み寄り始めたのかもしれない。
思考と共に、ピアノを弾き続ける。自分が満足のいく演奏を求めて、俺は何度も何度も繰り返して弾いた。
途中、奏の家が騒がしくなったのを微かに聞いたが、俺は練習に没頭した。
気づいた頃には日もすっかり落ち時計は既に九時を指していた。俺は自分の部屋に戻って、ふと窓に眼をやる。奏の部屋のカーテンは閉まったままだった。電気もついていない。奏の家自体、いつもの平日の賑わいを感じることはできなかった。
「奏、まだ帰ってないのか…」
俺は本棚に向かい、読みかけの本を一冊手にした。ベッドに腰掛けて、奏が帰ってくるのを待つ。
十時を過ぎ、十一時、十二時を過ぎても、奏の部屋の電気がつくことはなかった。さすがに俺も心配になり、気をもみ始めた。
「なにかあったのか？」
携帯電話に電話をかけてみたが、なんの応答もない。ますます焦りがつのる。
俺は家を飛び出して、奏の家の玄関を何度も叩いた。返事はない。

すると、俺の携帯電話が震えだした。ポケットから迅速に取り出すし、液晶画面に視線を送る。
「奏か？」
電話番号だけが画面には表示されている。見たこともない番号だ。震え続ける携帯電話。とりあえず電話にでてみると、電話の向こうから聞き覚えのある声が耳に入ってきた。
「……亮か？　亮だな？　お前今どこにいる！」
声の主は奏の父親だった。野獣じみた声に焦りが混じっていた。ただならぬその声の様子に、俺も生唾を飲み込む。
「ぁ、あぁ…亮だ。どうしたんだおじさん？　みんなどこにいるんだよ？」
俺の声も焦燥がにじみ始める。手にも汗が。
「いまか…いま、病院にいる…」
「え？…」
奏の父親の声が徐々に小さくなっていく。嫌な予感がじんわりと俺の心の中に染み渡っていくように広がる。俺はつまりそうな声で、
「病院？…なんでそんなところにいるんだよ？…」
「……」
おじさんは、押し黙ったまま答えなかった、何度か言葉を発そうと息をつまらせているのが聞こえてくる。
「お…おじさん、何とか言ってくれ。奏はどうしんだよ？　何で病院にいるんだよ？　なぁ…」
「……奏が…」
嫌な予感なんてものは、どうしてこうもあたるのだろう。
「……事故にあった。」
俺は走り出した。
上着を羽織ることもなく、マフラーをすることも忘れて。病院はすぐそこだ。おじさんの電話から放たれた声が俺の中に何回もこだました。
「…今日、学校のかえりに車にひかれたらしい…いま…緊急手術を

しているところだ…お前にも知らせるべきだとおもってな…病院は近くの……」
できれば、ギャグであってほしかった。病院に行けば、実は嘘でしたとか、今日がエイプリルフールならよかった。すべてが嘘なら、そんな嘘なら、俺はきっと笑って受け入れただろう。奏と一緒になって笑っただろう。
足を何度も、何度ももつれさせながら、俺は必死に走った。息を荒げて、なりふりかまわず走って病院をめざした。
奏のことしか頭になかった。奏の笑顔を何度も想像した。勝手に頭に浮かんできては、消えていった。
人に何回もぶつかり、肩からこける。周囲の視線はひどく痛いものがあったはずだ。無理に掻き分けるように俺は走りつづけ、何人目だろうか、三人ほどの集団を掻き分けた瞬間に首根っこをつかまれ、なにやら俺に文句を言ってきた。耳には入ってこなかった。
「お前なに急いでんだよ？」
「ふざけんな、こっちは機嫌損ねちまったぜ！」
「おい、兄ちゃん聞いてんのかよ？」
三人がかりで俺は押さえつけられて、路地裏に連れ込まれる。俺はなおも三人を無視し、一秒でも早く奏のもとに行こうとしたが、男たちはそれを阻んでくる
路地裏には人っ子ひとりいなかった。暗くて冷たいコンクリートが周囲を囲う。三人のうち一人の拳が俺の頬をとらえる。無心に俺は反撃した。あたりにあった鉄パイプを手にして、振り回し、言葉もなく俺は暴れた。
「お、おい！　こいつ頭イってやがる…」
危うく一人の大柄な男の顔面をとらえそうになる。攻撃は男の額をかすめて、コンクリートをわずかに砕いた。
「マ…マジでこいつやばいって…」
三人のうちの背が一番低い男が俺の背後に回りこみ、ナイフを俺の右腕に突き刺してきた。激痛はあったが、すかさず俺も鉄パイプ

をその男の眉間に突き刺す。
鈍く、骨が砕けたような音が路地裏に轟く。鉄パイプは眉間からわずかにはずれ、鼻を強打していた。刺さりこそしなかったが、俺はそのまま鉄パイプを振り回して、その男の首もとを、持ちえる力のすべてを込めて振り抜く。
小柄な男はノビてしまい、地面にうつぶせに倒れる。俺は残った二人に向かっていく。逃げる男たち。俺は鉄パイプを投げつけるが、当たることはなく、切なく空洞の音が響いた。
右腕の傷がひどく痛んだが、俺は病院をめざした。
傷を隠して、できるだけ早く走る。おびただしく俺の右腕から紅い血液がしたたっていた。額に汗が拭えども、拭えども流れてくる。体が冷たくなっていくのが分かって来た。
奏の笑顔が、瞼の裏にある。
薄れそうな意識の中、俺の景色はゆがんでいく。病院の入り口にはいると、俺はひざを折ってしまった。頭蓋骨が地面に抵抗なく落ちる音が、病院中に響いたことだろう。
冷たい病院の廊下から、俺は人が地を踏みしめるごとに織成す振動音を、鼓膜にジンジンと感じた。目の前の景色が、少しずつ漆黒に包まれていく。俺はただ見ていることしかできなかった
暗い世界の中に、俺の両親の声がした。俺の枕元で母さんが泣いているのがわかる。洗いたてのシーツのにおい。何かが俺の上にかけられているのがよくわかった。目が開かない。俺は手を母さんに持っていきたくて、できるだけ力を入れようとしたけど、なぜかこの体は動こうとはしてくれなかった。耳と、鼻が妙に周囲の状況を伝えてくれた。
「亮…なんてかわいそう…」
母さん、そんなに泣かないでくれ。その言葉すら、俺の喉から出てこない。
「奏ちゃんも…本当にかわいそう…。」
奏…。そうだ、奏だ。

「なんで…こんなことに…」
親父の声も震えている。その他にもたくさん。おじさん、おばさん、みんなが泣いている。鼻を大きくすする音。
俺の瞼が次の瞬間開いた。
「奏！」
俺は勢いよく状態を起した。母さんが俺を抱きしめる。周囲の安堵した表情が目に入ったかと思うと、刹那のうちにその表情は悲しみに変わってしまった。
「親父…奏は…」
静かに俺の隣のベッドをみる。そこには静かに眠ったままの奏が横たわっていた。俺は母さんに左手を添えて離れるよう促そうとした。そのとき、俺は右腕に包帯がまかれていることに気がついた。
「奏…」
ベッドから出て、母さんの制する手をそっと振り払う。奏に近づき、包帯の巻かれた右手をかばいながら左手を白い頬に添えた。あたたかい。
「奏は？…」
息はしている。
「奏はどうなった？…」
においもあった。奏の母親がわっと泣き崩れてしまう。それをおじさんが支えるのを横目で見ていた。
親父が口を開いてくれた。
「昨日夜、事故にあったんだよ…」
「……それは知ってる…」
俺は親父に向き直った。
「……もう……起きないらしい…」
どういう意味か、理解できなかった。
「…起きない？」
「そうだ…奏ちゃんは…もう起きない…」
「なにが？…」

つらそうな親父に、俺は当たるように問い続けた。
「……分かってくれ、亮。彼女は…もう」
「……奏は…起きないのか？…」
心が壊れるときの音を、俺はそのとき確かに聞いた気がした。
俺と両親は、奏とおじさんたちを残してひとまず帰ることになった。
帰りの車の中で、俺は、明るくなりかけた空を見上げる。
雲が、昨日と同じく一つもなかった。鳥たちが行き交っている。きっと、今日は天気がいいのだろうと思った。風間さんと宮路に説明しないといけない。残念がるいかもしれないが、仕方がない。なんなら、俺が作るのもいいかもしれない。ミートボール丼、だったか。あれなら作れそうだ。俺はごめんだから、奏と同じ弁当をたべたい…。
お前の弁当が…俺は食べたい。
お前と…今日も…弁当を…一緒……
喉が痒かった。明るい空がにじんでいくのを、俺はとめることができなかった。こらえきれない声が漏れてしまう。
昨日、目の前にあった今日は…昨日、立てたはずの予定は…今日もあるはずだった奏の姿は…いったいどこにいったのか。
あの独特な笑い方がかわいかった。
あの鞄が似合っていた。
あの髪型は毎日変わっていた。
ベージュのジャケットはお気に入りだったのだろうか。
あったのに…すぐそこにあったのに…手の届くところに…抱きしめられるところに、奏はいたのに、俺は何で抱きしめなかったのだろうか。
いいたいこともたくさんあったのに、言わなきゃいけないことも、これから言いたいこともあった。なのに、急にこんなことになるなんて、誰も考えたりしないだろう。
こんなことになるのなら、俺はどうしてもっとはやくあいつに言

わなかったのだろうか。
好きの一言で、俺は何を失うことを恐れていたのか…。
「奏…」
お前を失うことになるのなら、俺は何を他に恐れたというのだろうか。
部屋に帰ってきた俺は、開かない窓に手を押し当てる。奏はそこにはいない。
昨日のままの部屋が、俺の目の前で静かに奏の帰りを待ち続けている。それを見ていると、俺は切ない気持ちを抑えきれない。
俺の右手の指も、まったく動こうとしなかった。ピアノはもう弾けないのだろうか…帰りに両親からは、ピアノを弾くことをあきらめろという言葉を貰ったが、ありがたいことこの上ない。
奏を失って、俺のピアノを失って。他になにが俺にできる。なにが、残る。
ふと、ピアノの上に置いてあった、パペットが目に入った。
それをやさしく抱きしめる。奏の、あの夜の笑顔。それがよみがえってくる。
思えば、あの夜から俺たちは近づいていけたように思う。このパペットが、俺たちをここまで近づけてくれた。奏の声がよみがえってくる。
「わ、わたしね、パペットを作るのが好きってい言うか、得意って言うか、手芸は全部好きなんだけど、その中でも一番好きなのは、やっぱりパペットをつくることで…だからその…」
ドッと涙が再び溢れ出した。パペットを強く、強く抱きしめる。
何でつらいことはここまで思い出してしまうのか。そのときの奏の表情を、照れくさそうな仕草を…もう一度、何度でも俺は見たくなってしまう。窓を見ると、
「エヘヘヘッ…」
「か、奏…」
「あ、あれだね…はずかしいね。」

「……」
「じゃ、じゃあもう寝るね…おやすみなさい…。」
キスをされた頬に触れる。いまは、俺の流す涙でぬれた頬。俺はさらにパペットを抱きしめ、背中を丸くして嘆いた。
「ごめん…奏…ごめんな…」
人形から奏のにおいが、微かに香った。その香りは俺の心をひどく締め付けてくる。
「おれ…お前にいえなかったことが…言いたいことがたくさんあった…」
今思えば、お前は楽しかったのか…ほんとうに笑えたのだろうか…俺といて嫌じゃなかったのだろうか…。
「…もっと…もっとお前といたかったのに…」
お前は、俺の気持ちをしっていただろうか…俺は…お前にいえなかったこと、いまならきっと言えると思うんだ。もう一度だけでいいから、お前に会いたいんだ。どうか…神様。
俺の頬を伝って、涙がパペットにしみこんでいった。
「お前のこと…好きだったかもしれないのに…」
肩を落として俺は言った。
「……ほんと？」
ちょうど俺の高等部から声がした。それは確かに…
「！」
周囲を見回した。確かに、奏の声だった。
「奏？」
「亮くん…今言ったこと本当？」
頭の奥底から、奏の声が確かに聞こえてきた。俺は窓に駆け寄る。息を整えて何度も見直したが、そこには誰もいない。必死に俺の部屋を隅々まで探す。
「亮くん？」
「どこだ奏！」
すると、手元のパペットがもぞもぞと動くのを感じた。思わず俺

は人形を目の前に突き出して構える。
「……まさか」
申し訳なさそうに、奏の声にあわせてパペットが小さな両手で人工的な頭を触っていた。俺の顔中の汗腺から汗が噴き出し、冷たくなる。左手に携えられたパペットは、再び奏の声にあわせて動き続けた。
「亮くん…なんか…これ…って…」
「……お…ぁ…」
一人と一つは息をのんだ。
「えええええええええええええええええええええええぇ！」
声が朝の月下家に響き、両親が俺の部屋にかけてくる足音がした。
その日、俺たちには奇跡が舞い降りたことは、疑いようのある事実になった。

第四章　「奇跡」（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがたく思います。
ぜひ感想を添えていただければ、今後の参考にもなります。
どうかよろしくお願いいたします。　　夕　結花

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7554d/

パペットとカーテン

2010年10月11日01時38分発行